看　板

サイン　H2100×W1800

サイン　H1800×W900

サイン　H600×W600

館内サイン・名札（一部）

新・福岡古楽音楽祭
2015年10月23日(金)～25日(日)

総合受付

新・福岡古楽音楽祭
2015年10月23日(金)～25日(日)

セミナー室①
セミナー室②

2015 新・福岡古楽音楽祭
2015年10月23日(金)～25日(日)
《会場》あいれふ・アクロス福岡

聴講生

2015 新・福岡古楽音楽祭
2015年10月23日(金)～25日(日)《会場》あいれふ・アクロス福岡

ARTIST／LECTURER

ワルター・ファン・ハウヴェ
Walter van Hauwe

新・福岡古楽音楽祭
SPOGLIATOIO
Welcome to Fukuoka Early music.festival2015

Mr. Giuliano Carmignola

Giuliano Carmignola & Venice Baroque Orchestra

新・福岡古楽音楽祭

古楽ステージ
リハーサル室
特別控室５

Welcome to Fukuoka Early music.festival2015

新聞記事

6/29 読売新聞(朝刊)

カルミニョーラら出演

今秋も新・福岡古楽音楽祭開催

今秋も福岡市・天神のアクロス福岡を主会場に「新・福岡古楽音楽祭2015」が開かれる。数々のプログラムが企画されるファン待望の音楽祭で、中でも10月25日、福岡シンフォニーホール（アクロス福岡1階）での「ジュリアーノ・カルミニョーラ&ヴェニス・バロック・オーケストラ」の演奏に関心が集まっている。

バロック・バイオリンの巨匠、カルミニョーラは、イタリア・バロック作品の秀でた演奏者として最高の評価を受けている。「欧州屈指の古楽器オーケストラ」と称されるヴェニス・バロック・オーケストラとの共演で、極上の演奏が期待できそうだ。

ジュリアーノ・カルミニョーラ ©Anna Carmignola

午後3時開演。入場料はS席6000円、A席4000円、小学生から大学生までの学生券2000円。チケットは、アクロス福岡チケットセンター、チケットぴあ（Pコード253・131）、ローソンチケット（Lコード82744）で販売中。

問い合わせはアクロス福岡チケットセンター（092・725・9112）へ。

9/30 西日本新聞(夕刊)

●新・福岡古楽音楽祭プレコンサート 古楽との出会い 10月21日(水)正午、福岡市天神のアクロス福岡シンフォニーホール。鈴木秀美（チェロ）、山本徹（チェロ）、上尾直毅（チェンバロ）。J・S・バッハ「無伴奏チェロ組曲第1番」、ペルゴレージ「シンフォニア へ長調」ほか。全席自由千円。アクロス福岡チケットセンター＝092（725）9112。

9/25 読売新聞(朝刊)

新聞記事

10/3 読売新聞(朝刊)

ビバルディ当時の音色で

23～25日 福岡で古楽音楽祭

「新・福岡古楽音楽祭2015」が23～25日、福岡市のアクロス福岡などで開かれる。クラシック音楽を作曲当時のスタイルの楽器と奏法で演奏する「古楽」の祭典で、「イタリアン・バロックの栄華」をテーマに、ビバルディの楽曲を中心に取り上げる。

メインの公演は、イタリアの名匠ジュリアーノ・カルミニョーラ(バイオリン)を独奏とするヴェニス・バロック・オーケストラ（25日）。ビバルディの協奏曲5曲のほかマルチェッロ、ガルッピの協奏曲も取り上げる。

室内楽コンサート(23日)には鈴木秀美（チェロ）、若松夏美（バイオリン）ら国内の演奏家が出演しソナタや歌曲を披露。鈴木らによるプレコンサート(21日)やワルター・ファン・ハウヴェ（リコーダー）の公演（24日）も催される。

演奏会会場は室内楽コンサート（あいれふホール）以外はアクロス福岡。☎092・725・9327。

10/6 朝日新聞(朝刊)

イタリアン・バロックを特集

23～25日 新・福岡古楽音楽祭

イタリアのバロック音楽といえば、どんなイメージだろうか。地中海のまぶしい陽光？きらびやかな弦楽器の調べ？2回目となる新・福岡古楽音楽祭2015が23～25日、福岡市内である。「イタリアン・バロックの栄華」をテーマに、秋の博多をちょっぴり南欧風に塗り替える。

一昨年15回で幕を閉じた福岡古楽音楽祭が装いも新たに再出発した、この音楽祭。国内外のトップレベルの古楽奏者が集い、アンサンブルの粋を聴かせてくれる。

23日は午後7時からあいれふホールで「イタリアン・バロックの室内楽 L'Incontro（再会）」。ビバルディやベラチーニらの名品を、鈴木秀美（チェロ）、若松夏美（バイオリン）、上尾直毅（チェンバロ）、鈴木美登里（ソプラノ）で。奏者と聴衆の福岡での「再会」を祝い、珠玉の曲たちとの出会いをことほぐ。

ジュリアーノ・カルミニョーラ
©Anna Carmignola

24日は午後5時からアクロス福岡国際会議場でリコーダーの名匠、ワルター・ファン・ハウベが登場。音量が小さく表情も乏しいと思われがちなリコーダーだけれど、素朴な縦笛のかれんさに一度はまったら、もうやめられない。トークを交えながら、楽器の奥深さをたっぷりと教えてくれる。

"トリ"はバロックバイオリンのジュリアーノ・カルミニョーラとベニス・バロック・オーケストラ（25日午後3時から福岡シンフォニーホール）。「四季」でおなじみのビバルディが残したバイオリン協奏曲などを並べた。この作曲家ならではの華麗な世界に浸れるはずだ。

21日にはランチタイムのプレコンサート（正午から福岡シンフォニーホール）も。問い合わせは音楽祭実行委事務局（092・725・9327）。

（編集委員・中村俊介）

新聞記事

10/9 読売新聞(朝刊)

●ジュリアーノ・カルミニョーラ&ヴェニス・バロック・オーケストラ　25日午後3時、福岡市・天神のアクロス福岡シンフォニーホール。イタリア出身のジュリアーノ・カルミニョーラさん(バロック・バイオリン)と、イタリアを代表する古楽オーケストラがビバルディの「バイオリン協奏曲」などを演奏する。S席8000円、A席4000円、学生券2000円。(アクロス福岡チケットセンター―092・725・9112)

10/10　西日本新聞(夕刊)

●新・福岡古楽音楽祭プレコンサート―古楽との出会い　21日(水)正午、福岡市天神のアクロス福岡シンフォニーホール。23日(金)～25日(日)にアクロス福岡などで開催される新・福岡古楽音楽祭2015のプレコンサート。バッハ「無伴奏チェロ組曲　第1番ト長調」、ベルゴレージ「シンフォニア　ヘ長調」ほか。全席自由、入場料千円。アクロス福岡チケットセンター=092(725)9112。

10/11 毎日新聞(朝刊)

「新・福岡古楽音楽祭2015～イタリアン・バロックの栄華」

アクロス福岡など 23～25日 2会場

「新・福岡古楽音楽祭2015～イタリアン・バロックの栄華」が23～25日、福岡市中央区のアクロス福岡と同区舞鶴2のあいれふの2会場で開かれる。2013年に第15回で終了した福岡古楽音楽祭を受け継ぐもので、新・音楽祭となって2年目となる。

メインの公演は3本立て。幕開けの「室内楽コンサート「イタリアン・バロックの室内楽L'Incontro(再会)」は23日午後7時、あいれふで。若松夏美(バイオリン)、鈴木美登里(ソプラノ)、鈴木秀美(チェロ)、上尾直毅(チェンバロ)がヴィヴァルディの曲などを演奏する。一般3500円など。

2日目は「ワルター・ファン・ハウヴェ　トークコンサート～リコーダー演奏の歴史」を24日午後5時、アクロス福岡で開く。通訳・リュートは佐藤豊彦。全席自由1500円。フィナーレの「ジュリアーノ・カルミニョーラ&ヴェニス・バロック・オーケストラ」は25日午後3時、アクロス福岡で。ガルッピやマルチェッロの曲など。S席6000円など。

アマチュアのステージや各種セミナーもある。音楽祭実行委(092・725・8327)。

【米本浩二】

ワルター・ファン・ハウヴェ

新聞記事

10/19 日経新聞(夕刊)

名曲誕生時の響き再び

福岡で「古楽音楽祭」23日から

10/20 西日本新聞(朝刊)

新・福岡古楽音楽祭 23日から福岡市 テーマはイタリアン・バロック

The Report　10月23日~25日　福岡市　　~イタリアン・バロックの栄華~

新・福岡古楽音楽祭 2015

◆志村聖子 (政策研究大学院大学文化政策プログラム 研究助手)

2015年の新・福岡古楽音楽祭が10月23日~25日の3日間，アクロス福岡とあいれふホールを会場に行われました。これまで15年続いてきた福岡古楽音楽祭（1999−2013）を受け継ぐため，18世紀音楽祭協会と（公財）アクロス福岡が実行委員会を結成して迎えた，第2回目の音楽祭となりました。

今年のテーマは「イタリアン・バロックの栄華」。ヴァイオリンのジェリアーノ・カルミニョーラ氏，チェロの鈴木秀美氏，ヴァイオリンの若松夏美氏をメインゲストにお招きして，ヴィヴァルディをはじめ，ヴェラチーニ，ジェミニアーニといったイタリア・バロック期の作曲家の作品が多く取り上げられました。また，これまでの福岡の古楽音楽祭でも縁の深い，リコーダーのワルター・ファン・ハウヴェ氏をオランダからお迎えして，トークコンサートやマスタークラスが行われました。

会期中は古楽愛好者が参加する古楽ステージ，充実した講師陣によるマスタークラスやチェンバロ・ワークショップのほか，古楽器やCD・楽譜の展示，パネル展なども行われ，古楽にどっぷりと浸かり，様々に楽しむことのできる3日間となりました。本稿では，これまで新・福岡古楽音楽祭実行委員のひとりとして運営準備に関わってきた主催者側としての立場から，今年の音楽祭についてリポートさせていただきます。

■室内楽コンサート「イタリアン・バロックの室内楽 ~L'Incontro（再会）~」

10月23日19:00　あいれふホール

出演は，若松夏美（ヴァイオリン），鈴木美登里（ソプラノ），鈴木秀美（チェロ），上尾直毅（チェンバロ）でした。幕開けの第1曲は，今年没後350年を迎えたメールラ（1594/95−1665）の「喜び歌え」。メールラはモンテヴェルディより少し後に登場した，イタリアのバロック初期を代表する作曲家です。「喜び歌え」は神様を賛美する歌だそうですが，従来の典型的な宗教音楽とは異なって軽快な3拍子の曲で，鈴木美登里氏の伸びやかな歌声が清廉で一体感のあるアンサンブルのもとで会場すみずみに届き，あいれふホールが一気に祝祭的な雰囲気に包まれました。続いて，バロック期において新しい発展を見せた器楽作品が次々に登場し，ヴァイオリン，チェロ，チェンバロによる劇的な感情表現を堪能することができました。マリーニの「ヴァイオリン・ソナタ」（作品8-3）では，苦悩を物語るかのような旋律が連綿と紡ぎ出された一方，ヴェラチーニの「ソナタ・アカデミケ」（作品2-12）ではヴァイオリンが雄弁と語り，時にチェロと対話するかのような二重奏を聴くことができました。

古楽音楽祭の会期に先立って行われたプレコンサート（10月21日，アクロス福岡シンフォニーホール）では，鈴木秀美氏より「当時の楽器は現在のモダン楽器のようには響かないものの「語る」ことには非常に適した楽器である」ことが紹介されました。確かに当日演奏されたバッハの無伴奏チェロ組曲第1番では，大きな空間でもアーティキュレーションがわかりやすく，チェロがあたかも詩を紡ぐように歌っていたことが印象的でした。一方，本日のプログラム（10月23日）では，ヴァイオリンの名手ジェミニアーニ作曲による「チェロ・ソナタ」（作品5-2）が演奏され，チェロが多様多彩な装飾をのせながら自在に饒舌に歌うさまを親密な空間で聴くことができました。

上尾直毅氏のチェンバロ・ソロによる，マックの「レ・ファ・ミ・ソによるカプリッチョ」では，

▲室内楽コンサート。左から，若松，上尾，鈴木美登里，鈴木秀美の各氏

調和のとれたルネサンス時代の音楽から脱却し、それまで禁じられていた半音や不協和音を使うなど、作曲家たちが新しい時代への挑戦を模索していたことが追体験できました。

今年のテーマ（イタリアン・バロックの栄華）に合わせて、バロック期のイタリアの作曲家に焦点を当てた本日のプログラム。締めくくりは、ヴィヴァルディによる世俗カンタータ「愛しい面影から離れ」。ヴィヴァルディは器楽曲のみならず声楽曲やオペラも多数作曲したと言われていますが、実際に声楽作品を聴く機会は少ないのではないでしょうか。器楽アンサンブルに鈴木美登里氏の豊かな歌声が合わさって色彩感に溢れ、あたかもバロック・オペラの１シーンでヒロインが心情を歌い上げているかのようなひと時でした。

■ジュリアーノ・カルミニョーラ & ヴェニス・バロック・オーケストラ

10月25日15:00　アクロス福岡シンフォニーホール

本日のプログラムのメインに据えられたのは、ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲（RV281, RV187, RV283, RV232）でした。ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲というと「調和の霊感」や、「四季」が含まれる「和声と創意への試み」が思い浮かびますが、本日のコンサートでは生で聴く機会の少ない曲目が選ばれました。

ルネサンス時代までの音楽は声楽を中心に発展してきましたが、バロック時代に入ると器楽曲において新たにソナタや協奏曲などの形式が生み出され発展しました。独奏楽器と弦楽合奏群が掛け合う「独奏協奏曲（ソロコンチェルト）」は、ヴィヴァルディの時代に特に発展し、急―緩―急の３楽章の形式もヴィヴァルディによって確立されたものといわれます。

本日のプログラムは、そのような急―緩―急のコントラストが存分に楽しめる構成で、特に急楽章ではトゥッティに弦楽器群（集団）ならではの迫力と疾走感があり、一緒に駆けているような気分を味わえました。

カルミニョーラ氏のボウイングは、楽器から距離をおいて上から振り下ろすような特徴があり、とてもダイナミックで、なおかつそこから紡ぎ出される音は変幻自在です。緩楽章では、アンサンブルが極上のまとまり感を見せつつも各楽器がそれぞれの色彩感を放ち、その上にカルミニョーラ氏の独奏による「語り」が自由自在にのせられていきます。バロック期において、声楽（独唱）による劇的な感情表現が発達していったように、器楽でも独奏が発達し、様々な表現の可能性が拓かれていったことが体感できました。

舞台上のカルミニョーラ氏は、足でリズムをとったり、踊っているようだったりで、全身で音楽を体現しているかのようでした。曲間にはぼそぼそと独り言を言っているような飄々とした側面もあり、事前にもっていたイメージ（チラシで見たカリスマ的な写真のイメージ）が覆され親しみを感じた人も多かったようです。

鳴り止まない拍手に応えて、アンコールは４曲が演奏されました。４曲目にヴィヴァルディの「夏」が演奏され、「ついに『四季』が聴けた」という聴衆のうれしい喜びで会場がざわつきました。室内楽コンサート（10月23日）と合わせてイタリアン・バロックを堪能できる珠玉の公演となりました。

■ワルター・ファン・ハウヴェ　トークコンサート ～リコーダー演奏の歴史～

10月24日17:00　アクロス福岡 国際会議場

古楽音楽祭２日目には、これまでの福岡古楽音楽祭でも縁の深かったハウヴェ氏によるトークコンサートが行われました。ハウヴェ氏と45年来の旧友である佐藤豊彦氏が通訳とリュート共演をつとめました。

古楽音楽祭で取り上げられる作品は、ルネサンスやバロック時代のものが多いですが、このトークコンサートでは、イタリアの作曲家ベリオ（1925－2003）の"Gesti（ジェスティ）"（1966年）に関する話から始まりました。

▲カルミニョーラ & ヴェニス・バロック・オーケストラ　©権原一久

▲トークコンサートで演奏するハウヴェ氏（右）と佐藤氏

ハウヴェ氏がオランダでリコーダー奏者として活動し始めた1960年代、リコーダーのために書かれた作品は多くなく、「それまでに発掘された40年分くらいのバロック時代の作品」と「5年分程度の現代曲」のストックしかなかったそうです。そのような中で、リコーダーのために書かれたジェスティは、4～5分ほどの曲ながら、リコーダー奏法に革新をもたらしました。

ジェスティの楽譜は、奏法を記号で示した新しい記譜法によるもので、作品を贈られたブリュッヘン氏（ハウヴェ氏の師匠）は当時その楽譜を見て「困惑した」というほど斬新なものでした。しかし、この作品を演奏するために呼吸、息、口、タンギングなどの使い方をコントロールし、それぞれの効果を組み合わせ、連ねていくことによって、表現の幅を無限に広げていくことが可能になったのです。

当日、ハウヴェ氏によって演奏されたジェスティは、リコーダーの音とは思えないような破裂音や声も登場し、緩急に満ちたスリリングな瞬間の連続でした。奏者がリコーダーを通して全身のコミュニケーションを行っているようであり、この作品が gesti（gesture＝ジェスチャー）と名付けられていることの意味が体現されているようでした。ジェスティの登場によって、この作品で要求される様々なアーティキュレーション、タンギングなどは、他の作品を演奏する際にも使えるということが認識されました。すなわちリコーダーの奏法の可能性が格段に広がり、リコーダーのために作曲された作品でなくても、それまでに発掘された「過去500年分の作品」を演奏できるようになったということでした。

例えば、J.S.バッハの「アルマンド」(BWV1013)はゆったりしたテンポの曲ですが、ゆっくりであるほど、ハーモニーや音と音との関係（アーティキュレーション）について考える必要が出てきます。そこでいかに旋律をつなげるか、といったテクニックのあり方を考える際には、ジェスティで培った奏法技術が応用できるとのことでした。

次に例として演奏されたのは、ヴィヴィアーニの「リチェルカータ」でした。最初に素材を集めて主題が提示された後に、ヴァリエーションを加えながら「本気で作曲を始め」て新しいカデンツァのあり方を探求（ricercare）するという構造の作品です。一音一音にはヴィブラートがかかっていないにもかかわらず、様々に軌跡を変え、変幻していく旋律を全体として聴くと、起伏に富んで濃淡が描き出されていることが感じ取られました。

1時間のトークコンサートは、佐藤豊彦氏の作曲による「うつろい」の共演で締めくくられました。古楽界で音楽表現の可能性を探究し、切り拓いてきたお二人ならではの息の合った演奏で、リコーダーとリュートの音があたかも尺八と琴の音であるかのように聴こえました。

本日のトークコンサートを通して、リコーダー奏法の奥深い世界を知ることができたとともに、ハウヴェ氏がリコーダーを例に取りながらも、他の楽器全般に共通する音楽表現の可能性の話をしていることが伝わってきました。古楽は過去の作品における表現のあり方を探究する人たちによって紡がれ、開拓されてきたということを実感し、対峙してきた人たち（ハウヴェ氏、佐藤氏）の歴史に触れることができる意義深い時間となりました。

■マスタークラス／古楽セミナー

マスタークラス　10月23日13:30　あいれふ講堂、24日10:00　アクロス福岡／
古楽セミナー　24日9:30　アクロス福岡

会期中、充実した講師陣のもとでマスタークラスが開講されました。昨年に比べて聴講生の数も増え、会場をはしごする姿も多く見られました。

今年のマスタークラスの講師は以下の通り。
ワルター・ファン・ハウヴェ（リコーダー）／鈴木美登里（声楽）／若松夏美（ヴァイオリン）／鈴木秀美（チェロ）／前田りり子（フルート）／佐藤豊彦（リュート）／上尾直毅（チェンバロ）

古楽セミナーの講師は以下の通り。
安積道也（合唱）／岩田耕作（古楽アンサンブル）

筆者が聴講した回から一部ご紹介します。ハウヴェ氏のマスタークラスは2日間にわたって行われました。「音楽とはmotion（動き）」であり、演奏する際には「どう表現するか」よりもまず先に

「どう動くか」(テンポ、リズム)について考える必要がある、と伺ったことが印象的でした。一方で、各音がどの和声に属しているかについても考える必要があり、それぞれの和声の動きをどのように作り出していくのかを、バロック音楽におけるイネガル奏法と関連して説明されました。すなわち、その作品をヴァイオリンならばどのように演奏するだろうかをイメージし、弓の動き(ダウン、アップ)で長短、重軽といった動きをつけるイメージをもつとよい、といったアドヴァイスがなされました。

鈴木秀美氏のクラスでは、若手演奏家のグループが受講しており、古楽における通奏低音の役割やあり方についてユーモアも交えつつ具体的なレクチャーを受けていました。楽譜にある音の連なりをどのように表現するかを考える際に、「固まり」を明確に意識すべきこと、その際に西欧の言葉(アクセント、それぞれの言語の特徴)が大きなヒントになることが示され、楽器演奏全般に共通するアーティキュレーションのあり方についての話を伺うことができました。また、強弱をつけなくとも音の長さを変えることでアクセントの効果を出せることが実演で示され、実際のステージで聴いた鈴木秀美氏の演奏の「語り」の背景にある技術や考えに触れられたひと時でした。

佐藤豊彦氏のクラスでは、日本ではまだ珍しいアーチリュートの受講生によって「チャコーナ」が演奏されました。17世紀のヨーロッパの宮廷で流行したシャコンヌが、もとはアフリカ大陸で生まれ、16世紀のヨーロッパや南米への伝来を経て新たにヨーロッパナイズされたものであるという歴史的背景が共有されました。作品の背景にあるイメージをもった上で、メロディーと伴奏部分を解釈し、意識して弾き分けることで、曲が立体的に浮かび上がることが体感できました。

■チェンバロ・ワークショップ

10月25日11:00　アクロス福岡 円形ホール

昨年に続いて、今年の古楽祭でも初心者のためのチェンバロ・ワークショップが開かれました。会場は円形ホール(定員120人)、親密感のある空間にアクロス所有のチェンバロが置かれました。昨年のチェンバロ・ワークショップは子どもの部のみの設定でしたが、大人の方からの強い要望に応え、今年は大人の部も開催されました。講師は福岡県在住でチェンバロ奏者の山本香代子氏です。

前半の「子どもの部」に参加したのは小学生から高校生までの８名で、全員がピアノを習っています。バッハのインヴェンションや平均律など、ピアノで練習してきた曲をチェンバロで演奏しました。感想は「鍵盤が固い」「鍵盤が軽い」「鍵盤の幅がせまい」「思ったタイミングで音が出ない」など様々でした。ピアノとのタッチの差や出てくる音の違いを感じた人が多かったようです。

チェンバロはピアノと異なり、ツメで弦を引っ掻く構造をしているため、強弱を出しにくいという特徴があります。強弱での表現が限られる代わりに、装飾音を様々に加えたり、弾くタイミングを変えるなど、他の形で表現方法が発達しました。指のコントロールが非常に重要な楽器ですが、チェンバロの鍵盤をゆっくりめに打鍵してみると、ある所でツメが弦を引っ掻く手応えを感じる瞬間があるそうです。その感覚を指で感じ取れるようになると、表現の幅がぐんと広がり、タッチやタイミングで強弱を変えることも可能になるとのことでした。

▲チェンバロ・ワークショップで指導する山本 氏(右)

先生の演奏は、J.S.バッハのゴルトベルク変奏曲BWV988から「アリア」。メロディーはシンプルですが、装飾音や音色を変えながらゴージャスに響き、チェンバロの表現の多様さを味わうことができました。

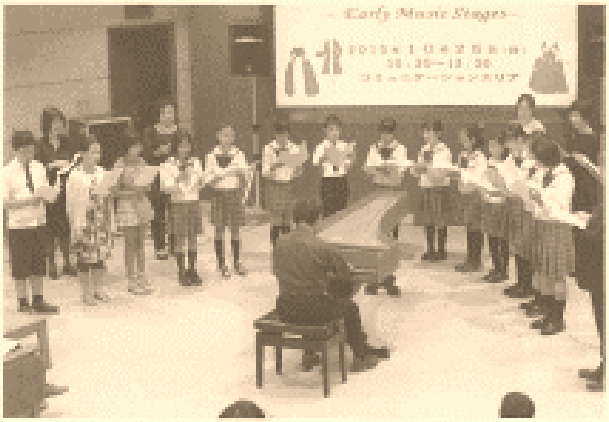
普段弾いているピアノがバッハの時代にはまだ存在していなかったことに驚き、バッハたちが弾いていたのと同様の楽器を間近に体験して様々な発見をした様子の子どもたち。今後、バロック期の作品を演奏する際には、これまでとは違ったイメージをもてるのではないでしょうか。

■古楽ステージ

10月24日14:00、25日10:30　アクロス福岡

古楽愛好者が日頃の研鑽の成果を発表できる古楽ステージは、２日間にわたって行われました。

▲前田 氏（左）と Duo Fumicaの藤原みか（中央），土田ふみ 両氏



▲長野公宣 氏指揮・チェンバロ，飯塚コスモスコモン少年少女合唱団

１日目はアクロス福岡の国際会議場にて行われ，リコーダーのアンサンブルやソロ，バロック・ダンスなどが披露されました。また，合唱指揮者・安積道也氏の指導のもとで朝から練習を積んだ新・福岡古楽音楽祭2015合唱団が登場。３つの「アヴェ・マリア」すなわちグレゴリオ聖歌，バード，そしてポーランドのゴルチツキ（バッハと同時代の作曲家）のアヴェ・マリアが歌われました。数時間の練習だったそうですが，団員の気持ちがひとつになってハーモニーを響かせ，エネルギーに満ちた演奏でした。

２日目は，会場をコミュニケーションエリアに移して開催され，声楽アンサンブルやチェンバロ・ソロ，器楽アンサンブルなど，ヴァラエティに富んだ楽器編成での多彩なプログラムが披露されました。

古楽マスタークラスで講師をつとめた前田りり子氏が Duo Fumicaと共演したプログラムでは，三者のフルートの旋律が調和して，表情豊かな演奏を聴かせました。この日の会場はアクロス１階のカフェスペース。通りがかりに思わず足を止めて聴き入った方もいらっしゃり，聴衆の皆さんも楽しまれたようでした。

その後は円形ホールに場所を移して，岩田耕作氏の指揮のもと，福岡祝祭アンサンブルによってカンプラのオペラ「ヴェニスの謝肉祭」（抜粋）が上演されました。弦楽器や管楽器，打楽器とともに声楽メンバーが登場し，総勢26名が参加し，当時の民衆が生き生きと生活している情景を見事に浮かび上がらせました。熱気あふれる中，最後はヴィヴァルディの「グローリア」を会場全員で合唱し，古楽音楽祭の古楽ステージが華やかに締めくくられました。

会期中のその他のイヴェントとして，ランチパーティ，楽譜やCDなどの展示，古楽の時代背景をわかりやすく伝えるパネル展などが開催され，アーティストとの交流を図ったり，古楽の魅力に様々な角度から触れられるような工夫に満ちた３日間でした。このような充実した内容の古楽音楽祭が実行委員会形式で運営され，２年目を迎えられたのは非常に意義深いことであると考えられます。

▲岩田 氏（チェンバロ）の指導による福岡祝祭アンサンブル

2016年の新・福岡古楽音楽祭は「爛熟のパリ・ロココ」をテーマに，10月8日（土）～10日（月・祝）の３日間，アクロス福岡とあいれふを会場に開催されます。ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル，寺神戸亮・戸田薫（バロック・ヴァイオリン），上村かおり（ヴィオラ・ダ・ガンバ），前田りり子（フラウト・トラヴェルソ），曽根麻矢子（チェンバロ）他の出演が予定されています。

さて，来年はどのような響きで空間が満たされるのでしょうか。来年も福岡でお会いしましょう。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

写真提供：新・福岡古楽音楽祭

新・福岡古楽音楽祭実行委員

村山暁、前田明子、小牧達彦、三久保佐和子、中山美智子、梅津教孝

新・福岡古楽音楽祭 2015 運営委員

樫原典子、左座武彦、志村聖子、須佐菜々美、添嶋麻里、森宗里紗、村岡彩子

2016 年の実施予定

来年度は「**爛熟のパリ・ロココ**」をテーマに 10 月 8 日(土)～10 日(月・祝)に開催します。

◯室内楽コンサート

2016 年 10 月 8 日(土)あいれふホール

出演:寺神戸亮・戸田薫(バロック・ヴァイオリン)、上村かおり(ヴィオラ・ダ・ガンバ)、
前田りり子(フラウト・トラヴェルソ)、曽根麻矢子(チェンバロ)

◯ストラディヴァリア・ナント・バロック・アンサンブル

2016 年 10 月 9 日(日)福岡シンフォニーホール

指揮:ダニエル・キュイエ

◯マスタークラス/古楽セミナー

2016 年 10 月 8 日(土)、9 日(日)

講師:寺神戸亮(バロック・ヴァイオリン)、上村かおり(ヴィオラ・ダ・ガンバ)、
前田りり子(フラウト・トラヴェルソ)、太田光子(リコーダー)、
曽根麻矢子(チェンバロ)、岩田耕作(アンサンブル)ほか予定

◯古楽ステージ

2016 年 10 月 9 日(日)、10 日(月・祝)

※2016 日 1 月 5 日現在の情報です。詳細が変更になる場合があります。

「新・福岡古楽音楽祭 2015 報告書」

発行日　2016 年 1 月 5 日
発行者　新・福岡古楽音楽祭実行委員会
〒810-0001
福岡市中央区天神 1-1-1　アクロス福岡 2 階
(公財)アクロス福岡　事業部企画グループ内
電話　092-725-9327
メール　kogaku.fes@gmail.com
HP http://www.kogaku.net/